

キリスト教の教会暦の 成立過程に関する一考察

斎藤 剛毅

序

出エジプト記12章25－27節に次のような記述がある。

主が約束されたとおりに、あなたたちに与えられた土地に入ったとき、この儀式を守らなければならない。またあなたの子供が「この儀式にはどういう意味があるのですか」と尋ねるときはこう答えなさい。「これは主の過越の犠牲である。主がエジプト人を撃たれたとき、エジプトにいたイスラエルの人々の家を過ぎ越し、我々の家を救われたのである」と。

これは後にユダヤ教の三大祭の一つとなる過越の祭と宗教儀式の成立根拠とその意味を明確に述べている聖書の個所である。ユダヤ教では過越の祭の次に夏のはじめの五旬節が祝われる。過越の祭の始まりから数えて50日目に行なわれることからペンテコステ（ギリシャ語で第50という意味）と呼ばれ、小麦の収穫感謝が祭の中心的意味をなしている。三番目の祭はレビ記23章34－43節に基づく秋の仮庵の祭で、穀物と果物（葡萄、オリーブなど）の収穫感謝を神に表わすために、葡萄園や畑に簡素な小屋を建てて、なつめやしの葉や茂った木の枝などで飾り付けをし、その中で7日間生活し、エジプトから導き出された先祖達が仮庵に住んだことを想起し、また現在約束の地で実り豊かな収穫にあずかっていることを喜び、歌い踊って神の恵みに感謝すること

が祭の意味である。ユダヤ教徒が三大祭の他に、安息日や贖罪の日などを定め、それらを守ってその意味を子供たちに教えて、宗教的遺産として継承してきたのは、神に選ばれた民として神との間に定めた契約を履行することは歴史の続く限り決して忘れてはならないことだったからである。

キリスト教はユダヤ教を親株として、そこから育ち成長した宗教であるから、良い意味での継承精神がキリスト教会にも受け継がれたのは当然である。それはユダヤ教の安息日礼拝が、キリストの復活を記念する「主の日」の礼拝となり、過越の祭が復活祭へ、五旬節は聖霊降臨の祝祭へと、キリスト教的意味合いに姿を変えて祝うようになっていったことに表われている。キリスト教会は原始教会の時代から幾世紀もかけて、教会の祭や祝の行事を制定しつつ宗教文化遺産として保存する努力をしてきた。それが「教会暦」として歴史の中で整えられ結実し、現在に迄至っており、記念する祝祭日は国々の地域的伝統を加味しながら文化的伝統遺産となり、時代を超えてヨーロッパ東西教会の文化として残存してきた。そして、その宗教遺産は南北アメリカ、アフリカ、アジア諸国にも大きな影響を与えてきた。日本でもキリスト教が宣教されて以来、カトリック教会及びプロテスタント教会に教会暦は影響を与えて現在に至った。

古代からユダヤ教徒が宗教的祭儀の意味を努力して子供たちに教えたように、日本でも神道や佛教の祭りや記念の行事が行われ、その子孫に受け継がれてきた。そして徐々にではあるが、日本に宣教が開始されて以来、キリスト教は少しずつ日本という土壤に根を張り始め、文学、絵画、音楽、建築など文化面にキリスト教的影響を及ぼし始めてはいるが、祝祭に関してはクリスマスやイースターなど国民に意識され始めたものの、その祝い方は商業主義にゆがめられており、社会的文化現象となりつつも、その根本的意味は国民に深く理解されているとは言い難い。キリスト教の祝祭日の背景には、ヨーロッパでの長い歴史的伝統があり、それぞれの祭儀には意味があることを、若い世代は正しく認識する必要がある。幸い筆者はキリスト教主義大学で教鞭を取る立場にあり、限られた数の若き学生たちではあるがキリスト教の宗

教的文化遺産としての教会暦を教科で教えることが出来るので、少しでもその真の意味を語ることに於いて責任を果たしたいと願っている者である。

筆者はヨーロッパ諸国に広がって土着したキリスト教の祝祭に関する教会暦が1－3世紀、4世紀にどのように発展し、また展開を遂げてきたのか、その成立過程とその背景にある意味を問いながら研究の筆を進めてゆきたいと思う。

I. 1－3世紀におけるキリスト教会の暦

A. 週毎の記念日の呼称

キリスト教が浸透していった東西ヨーロッパ世界において、ニケア会議（A.D.325）以前の教会暦の核となったものは「太陽の日」（日曜日）であり、この日は「週の初めの日」、「主の日」、また「第8の日」とも呼ばれた。

1. 「週の初めの日」

ユダヤ教の暦では一週の日々は、天体の惑星にちなんで名付けられることなく、旧約聖書の創世記1章1節から2章3節までに記述されている神の6日間に亙る天地創造と7日目の休息に基づいて、第1日、第2日、第3日…と単純に数えられていた。週の終わりの日、即ち7日目は神の休息にちなんで「安息日」（ヨム・ハシャバット）と呼ばれ、6日目は安息日への準備の日であった¹⁾。従ってユダヤ人にとっては「日曜日」という言葉はなかった。彼らにとって安息日は申命記5章15節に「あなたはかつてエジプトの国の奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るように命じられた」と述べられているように、先祖たちが奴隷状態から解放されたという喜ばしき神の御業を想起・感謝して礼拝を捧げる日として定められていたと同時に、労働から解放されて休息し、新しい週へ向けての新鮮な活力を再創造し、養う日でもあったのである²⁾。

ユダヤ人の7日目の安息日は金曜日の日没と共に始まる。夕刻の日没以前に仕事が終わって、それから初めて休息の時がくるという考えからである。全ての商店は戸を閉め、交通機関もストップしてしまうので、家族は家庭で静かな時を過ごす。安息日には主婦も一切仕事をしないから、金曜日の日没までに二日分の食事の用意をする多忙な時間を過ごすのである。そして、安息日が始まると主婦は食事の仕事から一切解放される。

土曜日の朝はゆっくりと起きて、家族揃ってシナゴーク（ユダヤ教会堂）に行き、旧約聖書の学習と礼拝の時を持ち、昼食後は昼寝を楽しんだり、信仰を養い深める書物や聖書を読む。安息日が終わって土曜日の晩が訪れると、人々は街に繰り出し、街は熱気に包まれるのはいつもの事であった³⁾。

原始キリスト教会の記録で初めて「週の初めの日」という表現が現れるのは、パウロの活動に関連する2回の記事である。第一は、コリントの信徒への手紙一16章2節であり、そこでパウロは「わたしがそちらに行き初めて募金が行われることのないように、“週の初めの日”にはいつも、各自が収入に応じて、幾らかずつでも手元にとって置きなさい」と述べて、エルサレムの貧しい人々への募金が行われることを求めている。第二は使徒言行録20章7節で、「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると…」と、原始教会の礼拝の様子が述べられている。この二つの記述から、J. A. ユングマン（Josef Andreas Jungmann, 1889-1975, インスブルック大学の典礼学の教授。The Early Liturgy, 1959の著作で有名。第2バチカン会議で典礼憲章に大きな影響を与えた人物）は「少なくともパウロが形成していった信仰共同体では、A. D. 50年代には日曜日にパン裂きが行われていたものであり、それはキリストを主とする礼拝が始まったことを意味する⁴⁾と推論している。著書 Sunday を著わしたウィリー・ロードルフもクリスチャンが「週の初めの日」という名前を作り出したとしたら、その日は「礼拝」のために特に重要な日であったろう」と、礼拝との関係で述べている⁵⁾。

原始キリスト教会の礼拝は疑いもなくユダヤ教の礼拝に負っていて、週末に行われたユダヤの礼拝形式がモデルとなっていたことは明らかであるゆえ

に、その礼拝形式においてはユダヤ教とは大差は存在しなかったであろう。イエスの弟子たちがユダヤ人であったことを思うと尚更である。従って、「ユダヤ人クリスチャンたちは初め律法に従って安息日を守り続け、シナゴークでの集会では聖書朗読と祈りを捧げたはずだ」⁶⁾とユングマンは語る。スイスの神学者、オスカー・クルマンは、ユダヤ人クリスチャンたちがユダヤ教との親密な関係を保っていた間は、この事実は確かであったろうと述べる⁷⁾。しかし、原始キリスト教会における安息日の遵守がどのように行われていたか、その詳細を把握することは難しいが、クリスチャンにとって先祖たちがエジプトの奴隷状態から解放されたことを記念・想起し、感謝する以上に重要であったことは、力強く人間の心に働きかけて、心を支配し、奴隷状態に保つ罪の力からの解放がイエス・キリストの復活によって可能とされたという事実であった。人間が罪を犯す報酬として与えられる死をキリストが打ち破り、復活された日が週の初めの日であった事実から、「週の初めの日」という新しい日の命名が罪の支配からの自由という新しい意味を伴ってなされたのは当然であったと言える。

2. 「主の日」

また「主の日」という呼び方が生まれた。それは主キリストの復活の日である。ここに響く主旋律は喜びであり、感謝、そしてキリストによって可能とされた死への勝利の希望である。D・グレゴリー・ディクス（Dom Gregory Dix. 版を重ねた *The Shape of the Liturgy* の著者、イギリスのナッシュドム修道院の修道僧）の表現によれば、復活は「時間の只中に啓示されたキリストにおける永遠の贖罪の現実化」⁸⁾であった。

「ヨハネの黙示録」の初め（1：10）に「ある主の日のこと、わたしは“霊”に満たされていた…」とあり、2世紀の初期に書かれたと思われる *Didache*（『十二使徒の教訓』）の中にも、「主の日に共に集い、パンを裂き、礼拝を守る」⁹⁾とあるので、ユングマンは「この〔復活〕記念日には1世紀の終わり頃には、「主の日」という特別の名前が与えられたと思われる」と

述べ¹¹⁾、*The Evolution of the Christian Year* (1953)の著者、A. A. マックアーサーも、その意見に同意を示している¹²⁾。

2世紀の初めに、「主の日」という言葉がマグネシアに宛てたアンティオキアのイグナティウス（後に使徒教父の一人と呼ばれる）の手紙の中に見出される。ユーセビウスの *Historia Ecclesiastica* 3：36によると、イグナティウスはシリアのアンティオキアの第3代ビショップ（主教）であり、小アジアの諸教会を訪問し、信徒たちを激励した。トラヤヌス皇帝の治世下に死刑を宣告され、シリアからローマに護送されたのであるが、彼はスルミナでの滞在中、マグネシアに手紙を書き、その後 A.D.108年にローマの闘技場で野獣の餌食となり殉教している¹³⁾。マグネシアに宛てた手紙の中で、イグナティウスはユダヤ教の安息日とキリスト教の日曜日は明白に違うことを終末論的思考の下で書き、「古き習慣の下に歩んでいた者は新しき希望へと来たり、もはや安息日のために生きることをやめて、主の日のために生きるようになる。この日に、主イエスと主の死を通してわれらの生命は躍動するのである」¹⁴⁾と安息日との違いを強調している。*Holy Week*の著者、J. D. デイヴィスは「このようにして主の日はキリストにおいて既に達成された救済を明示していたのであり、その日は神の永遠の秩序が確立したしるしであった。」¹⁵⁾と述べる。

ユングマンはまた、「主の日」が当時の皇帝崇拜反対という重要な意味を持っていたとして、次のように語る。

1世紀の終わり以降、*κύριος* (*dominus*) という語は、特にローマ皇帝の名を示すと共に、皇帝が神的存在であることを示す名となっていった。初期の皇帝は敢えてそのような称号を求めなかったが、ネロ皇帝が初めてその称号を要求した。ドミティアヌス皇帝自身も自らを「主或は神」と豪語した。それ以来、主（キュリオス）という名は皇帝が好むタイトルとなっていった¹⁶⁾。

この事実を考えると、初代のクリスチャンたちにとっては、皇帝は主ではなく、キリストのみが主であると告白し、真実と誠をもって神への礼拝を

守った日が「主の日」であったと言える。

3. Sunday（日曜日）

Sunday 或は Sonntag という英語或はドイツ語で表現されている語は、語源的にはキリスト教的意味内容をもっている。*Encyclopedia Americana* の中で“Sunday”の項を執筆したフレデリック・C・グラントは「[太陽，月を含む]惑星の名が週の日を導入されたのは，3世紀に入ってからである」と述べて，彼は「この導入，即ち週の初めの日を太陽の日と定めたのは，恐らくユダヤ教やキリスト教からもたらされたのではなく，占星術と太陽神教が結びついていたバビロニアからであろう」としている¹⁸⁾。

太陽の日（日曜日）という名の使用は，殉教者ユスティアヌスが148年から161年の間に書いた *Apology*（弁証論）の中でなされている。即ち，週日の礼拝に関して彼は，「太陽の日と呼ばれる日々に，都市や田舎に住む人々が一つの場所に集まった」¹⁹⁾と述べているのである。この記述から Sunday という語が2世紀の中ごろまでにはクリスチャンたちから採用されていったことが分かる。

ユダヤ教の安息日からキリスト教の Sunday はどのような影響を受けたのであろうか。安息日は週末の礼拝のモデルを提供したゆえに，かなり長い間，日曜日は安息日と同様に，日曜日の日没後の夕刻から始まったという事実にその影響を見ることができる。夕刻というのは，安息日が始まる金曜日の夕刻と同じ時間という意味である²⁰⁾。A. A. マックアーサーは「旧いユダヤ教的概念が深夜の0時に新しい日が始まるというローマ的概念に完全に変化するまでには数世紀を必要とした」²¹⁾と語るのは興味深いことである。マックアーサーは「主の日」というキリスト教概念に，太陽の日を重んじたミトラス教の影響を考えることには否定的である²²⁾。

コンスタンティヌス大帝が西暦313年にミラノの勅令を発してキリスト教を公認して信教の自由を定めた8年後，大帝は321年に帝国内の全住民すべてに，いかなる職種の者も Sunday（日曜日）に労働から離れて休息するこ

とを法律により定めている。法廷は休廷となり、農業に従事することは禁じられ、軍事訓練も休みとなった。初代のキリスト教伝道活動の立場から言えば、国家による Sunday の制定は、その日に公的な休みが許され、キリスト教徒が礼拝を行う日として定着するようになった故に、その意義は大きい。マックアーサーの言葉を借りるならば、「法律が主の日を重んじなければならぬことを定めたことは、キリスト教の福音の普及に大きく貢献した」²⁴⁾のである。

4. 第8の日

原始キリスト教会において、Sunday と並んでもう一つの人気ある呼び名は、「第8の日」であった。この名はユダヤ人の週日習慣と結合したものである。ユングマンはこの日に関して、次のように述べている。

クリスチャンたちは [ユダヤ教の] 安息日が一週のカライマックスであるゆえに、週が安息日をもって終わるという考え方を避けようとするようになった。安息日は旧約聖書の秩序の下にあったが、Sunday が新約聖書の救済秩序にかなうゆえに、次第に安息日より優勢になっていったのであるが、神が6日間で天地を創造され、7日目に休息されたという事柄に、新しい考え方、即ち8日目に神は新しい創造を始められたという解釈が加わり、Sunday は「第8の日」とも呼ばれるようになったのである。教父たちは殆んど一致してこの解釈に同意して、彼らの聖書解釈において、聖書に8という数字が出てくると、彼らは8日目における新創造の象徴を読み取り、キリストの復活を通して、世界は新しくされたと解釈したのである²⁵⁾。

紀元70年から100年の間に書かれたと思われるアレクサンドリアのキリスト教徒、バルナバの書簡の中に、「わたしたちは喜びをもって“第8の日”を祝う。その日にイエスは死より甦り、人々に顕現なさり、天に昇られたのである」(XV. 9)²⁶⁾と記していることから第8の日という呼称の一般性を裏づけている。

5. 復活の日

初期キリスト教時代に用いられたもう一つの名前は、「復活の日」である。この表現が初めて現われたのは2世紀に入ってからであるが、Sundayこそキリストがご自身の復活において神のご計画が完成された日であり、復活において死に勝利された記念すべき日であるゆえに、神の偉大な御業を賛美して礼拝を続けた歴史の過程でこの名が生まれたのは当然であるが、ユングマンは今日でもロシア地方では「復活の日」という名前を使っているという²⁷⁾。

B. 年毎の祝祭

1. パスカ（キリスト教的過越の祭）

初代教会においては、3世紀末までに年毎の祝祭に関してはパスカとペンテコステという二つの宗教的行事しか行われていなかったと知ることは、ある意味では驚きである。東方キリスト教会ではこれにエピファニー（公現祭。東方の博士たちに代表される異邦人にキリストが神の御子としての姿を現わされたこと、またイエスが洗礼を受けた時とカナの婚礼の祝宴で最初の奇跡を行われた時に、キリストとしての神性を現わされたことを記念する祝日）を加えねばならないが、西方教会には公現祭はなかった。クリスマスに関しては、ニケア会議（A. D. 325）以前の教会暦には祝祭日として記録されていない。クリスマスが教会の祝祭の行事として導入されるのは4世紀の初めのローマにおいてである。断食と懺悔を行う「四旬節」も「キリスト昇天記念日」も祝われてはいない。受難週も棕櫚の日曜日も嘆きの木曜日も教会暦にはない。

(1) パスカ

ギリシャ語のパスカ（πάσχα）は、ヘブル語のפֶּסַח，即ち過越の祭の意味である²⁸⁾。キリスト教の過越の祭は、安息日の影響から主の日が生まれたように、当然のことながらユダヤ教の過越の祭から生まれたものである。エジプトで天から下る災いが過ぎ越すようにと家の入口の柱2本に塗られた小羊の血は、人類の罪に対する神の裁きが過ぎ越すようにと十字架上で神の赦

しを求めて祈られた神の小羊，キリストの流された血の原型をなすものであり，エジプトでの過酷な重労働を伴う奴隷状態からの解放は，恐るべき力をもって人間を拘束し，滅びへと導く罪の力からの解放の原型であったのである。それゆえにキリスト教的過越の祭は，最も古くて重要な，毎年行われる初代教会の祭であったのであり，その起源は1世紀に遡ることが出来る²⁹⁾。

初代の西方教会においては，どのようにしてパスカが祝われたのであろうか。パスカ（キリスト教的過越の祭）は金曜日に始まり日曜日に終わった。祭の第1の部分は罪の悔い改めと嘆きであり，第2の部分は復活のキリストを心から喜ぶことであった。土曜日と日曜日の間の晩には厳かな儀式が行われている³⁰⁾。D. G. デイクスはその様子を次のように描写している。

徹夜祈祷（Vigil）が行われるのは，土曜日の夕刻から日曜日の夜明けまでである。初めに執事たちによる小羊への祝福があり，それに続いて聖書の言葉が朗読される。その間に合唱が織りなされていく。西暦200年頃のローマでは，聖書の学びの中にホセア書や出エジプト記における災いの過越の個所が含まれていた。それに続き，ヨハネによる福音書からキリストの死と復活についての講話がなされ，その後に司教による説教がなされ，最後に新しい回心者へのバプテスマ式と堅信礼（Confirmation，聖餐式に参与する資格を得るために一般信徒が受ける式）が行われた³¹⁾。

それから聖なるドラマへと転換し，嘆きから喜びへと移行してゆく。贖罪の完成としての復活の祭に向けて，徐々にキリスト教的過越の祭の最も重要な部分へ移行してゆくのである³²⁾。

(2) イースター論争

西方教会とは違って，小アジアの東方教会ではユダヤの太陰暦に従って，ニサンの月（太陽暦の3－4月）の14日（満月の夜）に，厳格な断食を伴うパスカを祝う習慣があった³³⁾。

ニサンの14日の夕刻に行われる聖餐式はイエスの最後の晩餐を記念するものでり，小アジアのクリスチャンたちによるニサンの14日の聖餐式は曜日に

関係なくユダヤ暦に基づいて行われたので、後に Quartodecimanism (quarto decima=14) と呼ばれた。教会史家フィリップ・シャッフ (Philip Schaff, 1819-1893, *The History of Christian Church*, 全8巻の著作により有名) は、Quartodecimanism (ニサンの月14日夕方の聖餐式を堅持する主義) は共観福音書の伝統に基づく、過越の祭に行われたイエスの最後の晩餐に従ったものであり、最も古い伝統に属すると考えている³⁴⁾。

小アジアとは異なって、西方教会、特にローマでは、ニサンの月の14日に続く日曜日迄パスカを祝う習慣があった。そして西方の殆んど全ての教会もパスカの祝祭に同意しており、それは日曜日の復活祭に強調点を置いていた。従ってローマの実践は聖なる週全ての日々を厳格な断食をして過ごし、主の受難を想起するという方式を生み出し、他方小アジアではニサンの月14日の断食をもって終わりとしたのである³⁵⁾。

小アジアの東方教会とローマを中心とする西方教会との間の相違は、強調点における相違であった。即ち、東方教会ではキリストの復活と切り離れたパスカの祝い方であり、西方教会ではキリストの復活日と結びつけたパスカの祝い方であった。その相違がいわゆるイースター論争を惹き起こすことになった。論争は年代的に3段階に分けることができる。第1段階はスルミナの司教ポリュカルポスとローマの司教アニケトゥウスとの間で行われた論争であり、それは150年と155年に行われたが合意を見るには至らなかった³⁶⁾。論争の第2段階は170年におけるラオデキアにおける論争であるが、これはアジアに限定された議論であった。第3段階は、190年から194年まで続いた論争であり、これは東西の全教会に及んでいる。ローマの司教ヴィクトルI世と小アジア派のエペソのポリュクラテスとの間に大論争が生じ、東西教会の分裂の危機にまで至ったが、イレナエウス (130頃-200頃, リヨンの司教, 小アジア神学の大成者) の介入により、小アジア教会側がイースターを日曜日を守ることに同調するようになり、東西の分裂は回避され、教会の統一が保たれた³⁷⁾。

このような経緯を経て、ローマ様式は小アジアでも受け入れられるように

なったのであるが、春分以降の満月後の日曜日を復活日とすることが教会全体の法として最終的に確定したのは325年に開かれたニケア会議においてである³⁸⁾。それ以来、ユダヤ暦のニサンの14日を重んじるパスカは異端とされ、その実践者は罰せられるようになった。モンタヌス派やノヴァティアヌス派はユダヤ暦のパスカを行ったとして咎められている。歴史家シャフはこのニサンの月を重んじる信仰は6世紀までその痕跡を留めており、またある東方の教会では現在に至っても「ニサンの14日」を守っている地域があるという³⁹⁾。

2. ペンテコステ（聖霊降臨節）

ペンテコステは旧約聖書レビ記23：15-24に基づく春の大麥の収穫祝日（ハグ・ハカツィール）、即ち農業の祭であった。後期ユダヤ教では、シナイ山においてモーゼに十戒が与えられたのはこの時期であったと考えるようになり、律法授与の記念すべき出来事が七週の祭（シャヴォート）としても祝われたのである⁴⁰⁾。

しかし、初代教会ではユダヤ教暦と切り離して考え、「使徒言行録2章に記録されている聖霊降臨の出来事と共に、クリスチャンが新しい契約の民とされたという性格において、教会が祝祭日として祝うようになった」⁴¹⁾とデイクスは考える。更に実際の事柄として、御霊の法則が罪と死の法則から教会の民を解放した（ローマの信徒への手紙8：2）ゆえにクリスチャンは新しい契約の民なのであり、それゆえにデイクスは「[[キリスト教的] パスカは永遠の贖罪の出来事がドラマ化されたことであり、ペンテコステはクリスチャンが御霊の恵みにあずかるようになったという事実、即ち贖罪が日常生活において現実化した出来事のドラマ化なのである」と、彼らしい表現をする⁴²⁾。

初代教会は復活節の日曜日（イースター）の早朝、聖餐式を伴うミサ礼拝をもって7週の祭を始め、ペンテコステ（聖霊降臨日）に向けて7週間を過ごすのであるが、教父テルテウリアヌス（150頃-220頃、西方教会の神学者）自身も「この時期をわれわれは大きな喜びをもって過ごした」⁴³⁾と書き記してい

る。この時期における断食は省かれ、断食しないことが定められた。ひざまずいて罪の赦しを懇願する祈りをやめて、キリストと共に甦ることが許されたという喜びの確信を表現するために立ったまま祈るようになっていった⁴⁴⁾。マックアーサーは「主の日ごとの聖餐式はキリストの復活によってもたらされた神の国の栄光を想起することであったので、ペンテコステの50日目は勝利のトランペットと同じ響きを持つものであった」⁴⁵⁾と述べる。この時期は聖霊降臨日において最高の喜びに達し、人々は神の聖霊が教会に注がれたことを心から感謝した。

II. 4世紀におけるキリスト教会の暦

マックアーサーは原始キリスト教の暦は三つの祭、即ち公現日、パスカとペンテコステが時の流れに従って行事化していったと推定する。公現日は2世紀の終わりに向けて、パスカは2世紀の後半に、ペンテコステは3世紀の初めに祝祭日の性格を持っていったとする⁴⁶⁾。彼はまた4世紀に入って新しく三つの祭が追加されていったと考察する。三つの祭とはクリスマス、聖金曜日（キリストが十字架につけられた日）と昇天記念日である⁴⁷⁾。キリスト教の暦が4世紀までに、どのように制定されていったのかを整理してみよう。

| 1 - 3世紀 | 4世紀 | 想起・記念すること |
|---------|--------|-----------|
| 公現日 | 公現日 | バプテスマ |
| | クリスマス | キリストの受肉 |
| パスカ | イースター | 復活 |
| | 聖金曜日 | 受難 |
| ペンテコステ | ペンテコステ | 聖霊の降臨 |
| | 昇天記念日 | キリストの昇天 |

初期の資料を調べてみるとキリスト教の暦はより複雑な展開を見せている。*The Apostolic Constitution* (『使徒教憲』, 4世紀後半375年頃シリア地方でまとめられた教会法の集成)の中には, *Testament of Our Lord* (350年頃のもので教会の規則や礼拝の秩序などに関する資料が含まれている)に述べられているものより詳細な記事があり, 上記のリスト以外に, 使徒たちの日, 聖ステパノや殉教者たちの記念日が加えられている³⁾。

Pilgrimage of Etheria という文書は, 385年頃にスペインの修道尼エテリアがエジプト, イスラエル, 小アジアのエデッサ, そしてコンスタンティノープルへと巡礼の旅をした記録であり, その中に4世紀後半のエルサレムにおいて行われていた公現祭, 棕櫚の日曜日, イースター, 昇天記念日(イースターの40日後), ペンテコステ, 聖なる十字架の日などが語られている⁴⁾。しかし, エテリアの記述には『使徒教憲』に述べられているような殉教者の記念日はないのであるが, *Recent Discoveries Illustrating Early Christian Life and Worship* の著者, A.J. マックリーンのように「彼女は実際は殉教者の記念日について記述したのであろうが, その記録部分は見失われてしまったのであろう」と推察する者もいる⁵⁾。

本論の第Ⅱ項では, 4世紀のキリスト教の暦に現われたクリスマス, 聖なる週, 昇天記念日などを取り上げる。また聖人や殉教者記念日, また断食の日についても, それらが前世紀にその起源をもちながらも4世紀に至って発展・展開したものとして考察したいと思う。

A. 年毎の祭—公現祭とクリスマス

1. 公現祭(キリストの顕現を祝う祭)

アレクサンドリアのグノーシス主義者バシリデスの見解に従ったクレメンスは, 2世紀にアレクサンドリアに在住していたが, 彼によると, 1月6日はキリストが洗礼を受けた日として祝われていたこと(『ストロマテイス』1, 146, 1), そしてバプテスマを記念する祭がエピファニーと呼ばれていたことが述べられている。エピファニーは日本のカトリック教会では「公現」と

訳されており、神的存在が世の救済のために公的に顕現することを意味するギリシャ語エピファネイア（ἐπιφάνεια）から来ている⁶⁾。

イエスの公生涯は洗礼者ヨハネからバプテスマを受けた時に、天がイエスに向かって開かれ、神の霊がイエスに降臨し、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が天から聞こえたという福音書の記述（マタイ3：16-17、マルコ1：9-11、ルカ3：21-22）を、グノーシス主義者は神的キリストが肉体的存在となったり、人間として生まれるはずがないから、イエスがヨルダン川で洗礼を受けた時に、神的キリストがイエスに降臨し、一時的にイエスに結びついたと解釈したのである。この見解は後に異端として退けられるが、バシリデスやその従者たちはこの見解に基づいて1月6日に神的キリストの顕現日としてイエスの受洗を祝ったのである。

グノーシス主義を排した正統的見解は、神的キリスト（ロゴス）が、イエス誕生の時に来臨し、ロゴスの受肉という形で歴史的人間イエスとなり、イエスにおいてご自身を現わされたとする立場である。であるから受洗時の聖霊降臨はイエスに神の御子としての宣教使命を自覚させ、世界の救済のために立ち上がらしめたということにおいて意味があるとするのである。

公現祭は本来イエスの誕生とは関係がない。なぜならバシリデスや彼の従者たちは神的キリストがイエス誕生の時ではなく、洗礼の時に顕現されたと考えたからである。しかし、なぜ1月6日がイエスの受洗日と考えられたのであろうか。荒井献氏がスイスの神学者、O.クルマンの論文「古代教会におけるクリスマス」（1949年）とドイツの歴史学者、W.ハルトクの論文「祝祭日、特にクリスマスについて」（1956年）を参考文献として執筆した論文「クリスマスの起源」において、この疑問に答えている。1月6日は、ナイル河を富ます神オシリスと富まされたイシスとの間に生まれた神の子ホルス（＝アイオーン）の誕生を祝う祭儀の日であったのであり、「バシリデスとその従者がこの日をキリストの受洗の祝祭日に選んだのは、異教徒に対抗して、この世に顕現した真の神的存在はキリストで、ヨルダン川で受洗した時に来臨したことを主張するためであった」と荒井氏は1月6日のエジプト起

源説を語る⁷⁾。

そして、洗礼と関連付けられた公現祭（1月6日）は後に東方オーソドックス教会に採択されてゆくのである⁸⁾。エジプトでは公現祭を主の受洗と降誕とを同時期に定め、祭として形成してゆくのであるが、やがて4世紀後半には東方教会全体に広がって行く。その経緯をオスカー・クルマンは *The Early Church* の中で次のように述べている。

4世紀の前半期に教会が公現祭を1月6日に行っていたことは事実であり、そのうちにキリストのバプテスマと降誕とが結合して行ったのである。結合の際に、受洗祭が除かれるという方向ではなしに、むしろ降誕の祝が追加されるという方向を取ったのである。その結果、二つの出来事は礼拝秩序の中で同時に二分されていった。1月6日の前夜はキリストの降誕祭、1月6日はキリスト洗礼祭として祝うという形を取ったのである⁹⁾。

上記の考察で明らかになったように、キリスト誕生が12月25日に祝われるようになる以前は、1月6日の前夜が喜ばしき誕生記念日として祝われていたことは明らかである。

2. クリスマス（キリスト降誕祭）

クリスマスという名は中世の *Christes Masse* 即ちキリストのミサに由来している¹⁰⁾。いつ頃、また何故キリスト降誕の祭がイエス洗礼記念のエピファニーから分離して12月25日という特別の日が変わったのだろうかという疑問が生じる。この疑問には学者間に諸説があるが、未だ合意に達しているわけではない。オスカー・クルマンは公現祭（エピファニー）が東方から西方教会、更にローマにすら伝えられていったが、それにもかかわらず12月25日のキリスト降誕祭が325年から354年の間にローマで行われたと推定する¹¹⁾。12月25日の降誕祭に関する最古の記録は336年の「フィロカルの歳時記」に現われてくるからである¹²⁾。

キリストの誕生日を12月25日として採択するようになった要因の第一は、

4世紀初頭から始まったキリスト論に関する教義的大議論があったこと（キリスト論に関する議論は、J. A. Jungmann の “Christological Disputes and Their Influences on the Liturgy”, chap.15, *The Early Liturgy*, pp.188-198 に詳しく論じられているが、その議論の中心点を記するならば、325年のニケア会議においてローマ教会が大きな役割を演じながら、神の御子キリストといえども神に創られた神より劣る存在であり、父より下位にあって神の意思に従う神人であり、神と人間の仲介者であると主張したアリウスの神学的見解を異端として退け、また父と本質を同じくする御子（ロゴス）が受肉してイエスとして誕生したことを否定したり、イエスの受洗において神的キリストが顕現したとするグノーシス主義的見解も異端として排除されたこと等）である。第二はミトラス教の儀式である。この宗教はローマ帝国内に広く勢力を拡大し、その主要な祭は冬至の12月25日に太陽神を崇めるものだったのである。第三はコンスタンティヌス大帝がキリストを「義の太陽」として礼拝し、また太陽の日（Sunday）をキリスト教の「主の日」として制定し、ローマ帝国内における宗教的また人心的統一を図ろうとした思慮深い政策的意図も考慮して、これら三つの要因がクリスマスに12月25日に決定してゆく大切な役割を果たしたと思われるとクルマンは推定する¹³⁾。このようにキリスト誕生が太陽神の祝祭日であった12月25日と結び付けられてゆく背景が歴史的に存在したのである。

4世紀の中頃から12月25日の祭がローマからキリスト教界全体に広がってゆき、そして4世紀後半になって東方教会と西方教会は降誕祭と公現祭とを並列して祝い始めたのである。クリスマスがアンティオケに紹介されたのは375年であり、シリアで編集された『使徒教憲』（*Apostolic Constitution*）では降誕祭はキリスト誕生記念として12月25日に、公現祭はイエス洗礼記念として1月6日に別々の祭としたと記述されている¹⁴⁾。

B. 記念日の成立

1. キリスト昇天記念日

前述した『エテリアの巡礼』（A.D.385）には、エルサレムにおいてオリー

ブの山に向かう厳粛な行進がキリスト昇天の日（イースター40日後、従っていつも木曜日に当たる）に行われたことが述べられている¹⁵⁾。D. G. デイクスはこの特別なエルサレムでの祭もキリスト教会に広まったと推察する¹⁶⁾。昇天記念日が持つ宇宙的意味を考えながら、*The Story of Liturgy*の著者、ギブソンは、「死より甦ったキリストはもはや地上空間に縛られることなく、天父の右に永遠の座を得た。キリストの永遠の人間性と救世主としての性質は奇跡的昇天の日と結びついて祝われるようになった¹⁷⁾と述べている。

多分381年にコンスタンティノーブルにおいて、ペンテコステの日に説教したナジアンズスのグレゴリー（329-89、381年のコンスタンティノーブル会議の間に、同市の司教に任命されたが、その年の終わりに辞任してナジアンズスに引退した。神学者であり、カパドキア教父の一人に数えられている人物）は、昇天記念日についても語っているので、当時のコンスタンティノーブルでは祭として祝われ始めていたことを証明している¹⁸⁾。

386年にアンティオケのジョン・クリソストム（c.347-407.アンティオケにおける聖書講解シリーズゆえに当時の偉大な説教者と評価され、Doctor of the Churchという称号を得ている）も昇天記念日に言及しているので、当時のアンティオケにおいて記念日が祭として存在していることを意味し、『使徒教憲』（AD. 375）においては昇天記念日が典礼暦に関する規定集の中に取り入れられていることから¹⁹⁾、キリスト昇天記念日は4世紀の終わりまでに祝祭日として定着したことを物語っている。

2. 聖人の日と殉教者の日

D. G. デイクスの研究によると、聖人の日に関する記念の礼拝が現われ始めるのは2世紀であり、最も早い記録は小アジアに残っており、156年にスミルナの教会からフィロメリウムの隣接教会へ宛てた手紙の中で、スミルナのポリカルプス（c.69-c.155）のことが書かれている²⁰⁾。G. M. ギブソンは非公式の形での聖人を覚える祝日は150年頃モンタヌス派の創始者であるモンタヌスが始めたであろうこと、そして155年に殉教した司教ポリカルプスを

聖人として覚えるために、聖人の誕生日よりも殉教した日を記念日として定めたことが習慣として始まったと推定する²¹⁾。

2世紀のローマにおいて聖人に対する祈祷がなされたという記録は存在しない。しかし、西方教会ではテルトゥリアヌス(c.160-c.225, アフリカ教会の教父で、『護教論』177, 「キリストの肉体について」c.210-212, 『マルキオン反駁』c.207などを出版した3世紀最大の神学的著作家)の時代、恐らく200年頃殉教者を記念する宗教儀式が採用されたのだろうとディクスは考える²²⁾。

オリゲネス(c.185-c.245, アレクサンドリア学派の代表的神学者であり、優れた著作により、ギリシャ教父と呼ばれている)が231年頃、『祈祷について』を執筆した時、彼は天使や聖人たちは天において我々人間のために執り成し祈っているのは当然であり、彼らの執り成しの祈りによって与えられる恩恵に対して感謝の祈りを捧げることは法に叶ったことである書いている。この事実からディクスは聖人たちを覚えて祈る実践は約200-230年の間に普通の出来事となったと結論づけるのである²³⁾。

ローマ教会はこの新しく始められた記念日礼拝を採択することには遅かった。ディクスは「初期のローマ暦には、使徒ペテロやパウロは別として、ローマの聖人たちの名前は1, 2世紀には記されていない」²⁴⁾と述べる。そして彼は、聖人たちを覚える記念日礼拝が習慣となったのは245年頃であろうと考える。そして、この聖人記念日が公式に採択されたのは4世紀に入ってからであり、やがてキリスト教会暦の欠かすことの出来ない部分になっていったとする²⁵⁾。アンティオケのジョン・クリソストムについて学問的書物を書いたC. バウアは、クリソストムの著作の中には4世紀に発達した記念日を裏付ける殉教者をたたえる祝日があったこと、即ち使徒ペテロやパウロは12月28日、使徒ヤコブとヨハネは12月27日、ステパノは12月6日、洗礼者ヨハネは9月23日と1月24日、そしてアンティオケ教会の殉教者の名前があることを付記している²⁶⁾。『使徒教憲』(375年)も殉教者の祝日を記述している²⁷⁾。

3. 受難週

英語で Holy Week, Passion Week と呼ばれる受難週は4世紀に突然現われたのではない。それ以前にイエスの受難と十字架の死の記念日、復活の記念日、昇天記念日が覚られて礼拝することが教会暦の中に取り入れられ始めていたのである²⁸⁾。受難週の起源はニケア会議以前のパスカと関係があり、*Holy Week* の著者、デイヴィーズはイースター即ちキリスト教のパスカ直前の二日間の断食（金曜日と土曜日）が時の経過と共に中東のある地域で6日間に及ぶようになったのだと考える²⁹⁾。

4世紀になって宗教的事情が一変する。キリスト教が国家の公認宗教となり、多くの人々が群れをなして教会に出席するようになったからである。教会の指導者たちは多くの入信希望者たちに新しい教育方法を考慮しなければならなくなった。クリスチャンへの迫害が終わりを告げ、迫害に伴った死の恐怖が消失し、その結果、差し迫った世の終わりが到来するという終末論的強調は弱くなり、逆にこの世における救いへのプロセスの方が強調されてゆき、キリスト教会は暦の中に歴史的に記念すべき日々を組み込むことによって、教育学習の効果的方法を作成しようとしたのである。その企画は具体的には「キリストの生涯が週毎に、また年毎に礼拝出席者たちに覚えられるように工夫された」³⁰⁾とデイヴィーズは考えるが、この考察は妥当性が高いと筆者は考える。この方法を具体的に現実化するために受難週が設定され、その目的は人々がキリスト受難の日々を想起しつつ毎日を過ごさせることにあった。

岸本羊一氏は『キリスト教礼拝辞典』の中で「受難週」の項を担当執筆しているが、前述した『エテリアの巡礼』に言及し、393年から396年の間にエテリアがエルサレムに巡礼し、当時のエルサレムの教会活動を詳しく述べていること、そして受難週に関して、「イースター前の主日（今日の「棕櫚の主日」）における棕櫚の行列、洗足木曜日の夜に行われる聖餐、聖金曜日の正午から午後3時にかけてのキリストの受難をめぐる聖書朗読と祈祷及び十字架の崇敬の儀式などが順を追って記されていること」を指摘する³¹⁾。この

受難週行事がエルサレムで発達した背景には、コンスタンティヌス大帝による諸会堂の寄進があったことも見逃せない。

4. 断食の日々

(1) 水曜日と金曜日の断食

2世紀初期の歴史的文献 *Didache*（『十二使徒の教訓』）の中には「偽善者のようにあなたがたは断食してはならない。なぜなら彼らは月曜と木曜に断食するが、あなたがたは水曜と金曜に断食しなさい」（Ⅷ, 1）³²⁾と教えられている。これは水曜と金曜が教会の断食の日として2世紀の初期に設定されたことを示す。月曜と木曜はもともとユダヤ教の断食習慣日であったので、初代教会は異なった断食日を採用しなかったであろう。しかしながら、水曜と金曜に断食する習わしは4世紀の終わりに至るまでは全教会の出来事とはならなかった。

The Testament of Our Lord (A. D. 350) は断食についてはイースター前の2日間の断食について述べているのみであるが³³⁾、375年頃にシリアで書かれた『使徒教憲』(V.15)の中にはレントの間の水曜と金曜の断食に関する厳しい規定が記されている³⁴⁾。国によっては土曜も断食の日として守られていたようである³⁵⁾。

(2) イースター前の断食

マクレアンによると、レントの起源はキリストの死の日に断食して過したという強い願いから生じたとしている³⁶⁾。レントとはイースター前の40日間の断食を意味する。最初の3世紀間は、イースターへの心の準備としての断食は2日或は3日を超えることはなかったということが、エウセビウスの *Ecclesiastical History* (vol.2) に記されているイレナエウスの言葉から明らかである。しかし、レント40日間の断食の記事が最初に現われるのは、ニケア会議(325年)で制定された「教会法規」の中であり、イエスの40日間の荒野での断食にならって「レント40日間」と決めている。このレントの断食は、イ

ースターの日にはバプテスマを受けたいと願う志願者が断食して心の準備をすることがそもそもの起源であったのである³⁷⁾。

東方教会ではレントの断食は7週間行われるが、土曜と日曜は断食を控えたので、実際は36日の断食であった。西方教会では6週間の断食が行われていたが、日曜日の断食は除かれていた。エルサレムの教会のみ4世紀には40日断食が行われていたが、このレントの断食習慣は地方によって異なっていたという³⁸⁾。日曜日の断食が禁止されていた東西の教会では、日曜日にはパンと共にオイル、蜂蜜、塩、果物を食べることが許されていたが、ワインは許されていなかった³⁹⁾。

結 語

ユダヤ教徒と同様に、初代キリスト教徒は礼拝において神の聖性と永遠性、そして人間の歴史に深く関わりながら愛と正義と公正の実現を期す神の働きを体験して、神を賛美した。またユダヤ教の礼拝様式が基本的に大きな変化なしにキリスト教礼拝にも受容されていたことは事実である。しかし、礼拝は安息日にではなく、キリスト教徒にとって決定的な意味を持つイエスの復活の日を「主の日」として「週の初めの日」に、即ち Sunday（日曜日）に行ったのであった。

キリスト教が迫害を受けつつ布教された1－3世紀の段階では、信仰ゆえに生じた迫害と死への恐怖を伴いつつキリストの再臨とこの世への神の審判がなされる日が近いという差し迫った終末意識を信徒達はもっていた。それは死の彼方に仰ぎ見る天国における至福の救済を待望するものであった。迫害を受けながら250年の間にキリスト教はローマ帝国内に確実に根を張り続け、宣教の輪が広がっていった。教会の進展の中で1－3世紀の間に教会の行事として定着していった年毎の祝祭は、主としてキリスト教的過越祭としてのパスカとペンテコステ（聖霊降臨祭）であった。しかし、東方教会では公現祭（キリストの顕現を祝う祭）が祝われていた。ここにもユダヤ教の影

響を否定することは出来ないが、キリスト教会はそれらの祝祭の行事にキリスト教独自の意義を加味しながら教会の暦を作成していったのである。

4世紀に入って状況は大きく変わった。コンスタンティヌス大帝が313年にミラノの勅令を発してキリスト教を公認したことにより迫害の時代が事実上終焉し、終末論的緊迫感と救済の来世志向が薄らいでゆき、逆に救済の現世志向が強まっていったからである。またコンスタンティヌス大帝がキリスト教信徒の礼拝の日であった Sunday を公的な休息の日として法律で定め、大帝自らがキリスト教信仰に回心し、積極的に教会堂の寄進を行ったので、多くの人々がこぞって教会に出席するようになり、教会に多数の信仰志願者を生み出すことになった。その志願者たちに新しい宗教教育方法を考案して、効果的な指導をする必要に迫られた教会の指導者たちは知恵を尽くして企画した成果が教会暦の中に見ることが出来る。即ち、イエス・キリストの誕生、受洗と宣教活動、そして受難の死と復活、更に昇天に至るまでの過程を、週毎にまた年毎に教会出席者たちが学習し、覚えられるように工夫された跡が教会暦に見られるのである。教会暦の中に、それまでイエスの受洗においてキリストが顕現されたとして祝った1月6日の公現祭と切り離して、独自にキリストの誕生を祝う12月25日のクリスマス（キリスト降誕祭）を設けた。キリストの十字架上の死に至る受難週は、エルサレム入場の際に棕櫚をもって迎えられたことを記念して守られる棕櫚の主日と棕櫚の行列、洗足の木曜日とその夜に行われる聖餐、イエスの十字架に至る受難と死を偲ぶ金曜日の行事は断食を伴うようになっていった。そして、大きな祝祭日としての復活を記念するイースター（復活祭）の行事が受難週に続くものとして教会暦に加えられた。東方教会ではキリストの復活とは切り離して、キリスト教的過越の祭としてのパスカの行事を行う際に、ユダヤ暦に倣ってニサンの月の14日に断食を行ったが、西方教会ではニサンの14日に続く日曜日まで断食してキリストの復活を祝っている。325年のニケア会議以後、東方教会も日曜日にイースターを守るようになる。そして復活祭の次に昇天記念日が教会暦に加えられていく。

4世紀における教会暦の発展的成立は東西両教会の安定と拡大を物語る。それと同時に1－3世紀の間に多くの人々が迫害の中で殉教したことが想起・回想されて、殉教死の日が殉教記念日として覚えられるようになっていった。また教会の発展に大きな功績があり、その崇高な信仰の生涯を全うした人々が聖人としてみなされるようになり、聖人の日が教会暦の中に加えられていった。それは聖人の高德からもたされる加護や執り成しの祈りへの期待とが重なって、聖人崇拝にもなっていった。

4世紀になって特に教会暦が詳細な内容をもって発展していった経緯を考えると、キリスト教会指導者たちのしたたかな教育的考案と工夫を見逃すわけにはゆかない。教会指導者たちは賢く、新しく拓かれた伝道の可能性に対応して、教会の礼拝に急激に増加した大衆の信仰訓練と教義的学習の教育的価値と効果を教会暦作成の中に見出したからこそ教会暦の内容が整えられ充実していったとも言えるのである。

註

I. 1－3世紀におけるキリスト教会の暦

- 1) A.A.McArthur, *The Evolution of the Christian Year* (London:SCM Press, 1953), p.13, see also Willy Rordorf, *Sunday* (trans. by A.A.K.Grahm), p.13.
- 2) “SABBATH”, *The Oxford Dictionary of the Christian Church* (2nd.ed, 1974), p.1217. シャバットは聖書の中で、新月祭と一緒に記述されていることがあるので（例えばイザヤ1: 13,アモス8: 5), 月をめぐる宗教儀式と関係があったのではないかと推定させることがあるが、イスラエル人がカナンに定住して、農耕を営むようになってから、シャバットは月の相から離れ、もっぱら人々と家畜の休息の日へと変質したのだろうという見解を吉見崇一氏は『ユダヤの祭と通過儀礼』（リトン社, 1994年), 35-36頁の中で述べている。
- 3) 手島佑郎『創世記, 上－ユダヤ発想の原点』（ぎょうせい KK, 1990年), 281-284頁。
- 4) Josef A. Jungmann, *The Early Liturgy* (trans. By F.A.Brunner, Nortre Dame: University of Nortre Dame Press, 1959), p.20.
- 5) W.Rordorf, op. cit., p.214.

キリスト教の教会暦の成立過程に関する一考察（斎藤）

- 6) Jungmann, *op. cit.* W.O.Oesterley and G.H.Box, *Religion and Worship of Synagogue* (London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1961), pp.356-383.の中で Oesterley と Box は、ユダヤ教の会堂における日々の礼拝は一般の人にも公開されており、一日3回、祈りとシェマーの朗読がなされること、そして安息日礼拝の時間はより一層長く、①シェマー（申命記6: 4-9, 11: 13-21, 民数記15: 37-41）の朗読と暗誦、②モーゼ5書と預言諸書からの朗読、③朗読個所の解説、④聖句個所の説教、⑤祝祷と会衆の「アーメン」応答という順序で進み、終わることが述べられている。
- 7) Oscar Cullmann, *Early Church* (ed. By A.J.B.Higgins. London: SCM Press, 1956), p.10.
- 8) Rordorf, *op. cit.*, p.118.
- 9) D.G.Dix, *The Shape of the Liturgy* (Glasgow: The University Press, 1945), p.336.
- 10) *Didache*, XIV, 1 (trans. By K.Lake. in *The Apostolic Fathers*, I, 331.
- 11) Jungmann, *The Early Liturgy*, p.20.
- 12) A.A.McArthur, *The Evolution of the Christian Year*, p.14.
- 13) K.Lake. *The Apostolic Fathers*, Vol. I. p.166.
- 14) Ignatius to the Magnesians, IX, 1; *The Apostolic Fathers*, I, 295.
- 15) J.G.Davies, *Holy Week; A Short History* (London: Lutter Worth Press, 1963), p.17.
- 16) Jungmann, *op. cit.* p.21.
- 17) F.C.Grant, "Sunday", *Encyclopedia Americana*, XXVI, 32.
- 18) *Ibid.* ローマでは紀元前27年に在位した皇帝アウグストゥスの時代に、太陽と月、そして五つの惑星がローマ神話と結びついて、週の日として名づけられていた。週の最初は太陽神の日、次は母なる月ダイアナ女神、火星マルス神、水星メルキュリウス神、木星ユピテル神、金星ウェヌス神、土星サトゥルヌス神というように七つの日に神々が対応していたのであるが、後にゲルマン世界でローマの神々の一部がゲルマンの神々と入れ替わって、ユピテルがドーナール、ウェヌスがフライヤとなり、木曜 (Donnerstag)、金曜 (Freitag) となったという。(Hans Maier, *Die Christliche Zeitrechnung*. Verlag Freiburg, 1991. 野村美紀子訳『西暦はどのようにして生まれたか』教文館1999年、29頁参照)
- 19) *Apology*, LXVII; Alexander Roberts and J.Donaldson (eds.) *The Ante-Nicene Fathers*. I. 186.
- 20) A.A.McArthur, *The Evolution of the Christian Year*, p.15.
- 21) *Ibid.*
- 22) *Ibid.*, p.14.
- 23) *Ibid.*
- 24) *Ibid.*
- 25) Jungmann, *The Early Liturgy*, p.22.
- 26) The Epistle of Barnabas, XV; *The Apostolic Fathers*, Vol. I. p.397.; See also "Barnabas, Epistle of" *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, p.134. また「復活日」, 『キリ

スト教大事典』(改訂新版, 教文館, 1988年), 910頁参照。

- 27) Jungmann, *op. cit.*, p.21.
- 28) D.G.Dix, *The Shape of the Liturgy*, p.338.; イースターという一般的呼称は, 古代ゲルマン民族の春の女神 Austro の祭から来た用語である (英 Easter, 独 Ostern)。「イースター」, 『キリスト教礼拝辞典』(岸本羊一, 北村宗次編, 日本基督教団出版局, 5版, 1998年), 28頁参照。
- 29) Philip Schaff, *History of the Christian Church*, Vol.II. (New York: Charles Scribner' Son's, 1891), p.207.
- 30) Jungmann, *op. cit.*, p.27.
- 31) Dix, *op. cit.*, p.338.
- 32) Schaff, *op. cit.*, p.208.
- 33) Jungmann, *op. cit.*, p.26. ニサンとはユダヤ暦での初めの月であり, 4月に相当する。このニサンの月に過越しの祭が行われる。ニサンの月の14日の午後に過越しの祭の小羊が屠られる。ニサンという名の起こりはバビロニアの捕囚期 (B.C.6) にあるようである。See "Nisan", *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, p.977.
- 34) Schaff, *op. cit.*, p.211.
- 35) Jungmann, *loc. cit.*
- 36) Eusebius, *Church History*, V. xxiv,16-17; *The Nicene and Post-Nicene Fathers*, Vol.I, 243-244.
- 37) Eusebius, *Church History*, V. xxiv.; *The Nicene and Post-Nicene Fathers*, Vol.I. 243-244.
- 38) Jungmann, *op. cit.*, p.26.
- 39) Schaff, *op. cit.*, p.218.
- 40) Dix, *The Shape of the Liturgy*, p.341.; see also W.O.Oesterley and G.H.Box, *Religion and Worship of Synagogue*, pp.395-397.; 「ペンテコステ」, 『キリスト教礼拝辞典』, 341-342頁参照。
- 41) Dix, *op. cit.*, p.341.
- 42) *Ibid.*
- 43) "On Fasting", XIV; *The Ante-Nicene Fathers*, IV, 111.
- 44) Jungmann, *The Early Liturgy*, p.27.; see also Davies, *Holy Week*, p.17.
- 45) McArthur, *The Evolution of the Christian Year*, p.147.

II. 4世紀におけるキリスト教会の暦

- 1) McArthur, *The Evolution of the Christian Year*, p.157.
- 2) *Ibid.*
- 3) *Apostolic Constitution* (『使徒教憲』), V. 1-20; *The Ante-Nicene Fathers*, VII, 437-449.;

キリスト教の教会暦の成立過程に関する一考察（斎藤）

“Testamentum Domini”, (*Testament of Our Lord*) に関しては, *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, pp.1353-54を参照。

- 4) M.L.McClure and C.L.Feltoe (trans.) *The Pilgrimage of Etheria* (New York: The Macmillan Co., n.d., pp.52-96.この文献は1884年にアレツツォの F.G.Gamurrini によって発見されたものである。“Etheria, Pilgrimage of”, *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, p.473.
- 5) A.J.Maclean, *Recent Discoveries Illustrating Early Christian Life and Worship* (London: S.P.C.K., 1915), p.44.
- 6) “Clement of Alexandria”, *Stromata*, I,21,146.1 (ed. by Sthlin), p.90.; 「公現 (主の)」, 『新カトリック大辞典』(研究社, 1998年), 838頁参照。
- 7) 荒井献「クリスマスの起源—クルマン, ハルトケの論文を通して」, 『初期キリスト教史の諸問題』(新教出版社, 1979年), 240頁。尚 O.クルマンの論文は英訳されて “The Origin of Christmas” として *The Early Church, Studies in Early Christian History & Theology* (ed. by A.J.B.Higgins, The Westminster Press, 1956), pp.21-36に載せられている。
- 8) O.Cullmann, *The Early Church* (ed. by A.J.B.Higgins. London SCM Press, 1956), p.25.
- 9) *Ibid.*
- 10) “Christmas”, *Encyclopedia Americana*, VI, 622.
- 11) Cullmann, *op. cit.*, p.29.
- 12) A.J.Maclean, *op. cit.*, p.40. 『フィロカルの歳時記』は暦に色彩を与えた Dionysius Philocalis という芸術家の名から取られたと考えられている。“The Philocalian Calender” *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, p.1084.
- 13) Cullmann, *op. cit.*, pp.29-31. 『キリスト教礼拝辞典』編集・執筆した岸本羊一氏は, 「ローマ皇帝マルクス・アウレリウス (Marcus Aurelius, 161-180) の頃から冬至の日である12月25日に「勝利に太陽神」を祝っていたことに影響要因を考えている。(岸本羊一「クリスマス」『キリスト教礼拝辞典』, 102頁。)
- 14) *Apostolic Constitution* (『使徒教憲』), V, 1-20; *The Ante-Nicene Fathers*, VII, 443.
- 15) M.L.McClure and C.L.Feltoe (trans.) *The Pilgrimage of Etheria*, p.87.
- 16) Dix, *The Shape of the Liturgy*, p.358.
- 17) George M.Gibson, *The Story of the Christian Year* (New York: Abingdon-Cokesbury Press, n.d.), p.358.
- 18) Gregory of Nazianzen, Oration, XLI, V; *The Nicene and Post-Nicene Fathers*, VII, 381. See also *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, p.599.
- 19) *Apostolic Constitution* (『使徒教憲』), V, 1-20; *The Ante-Nicene Fathers*, VII, 448. See “Chrysostom, St. John”, *The Oxford Dictionary of Christian Church*, p.285.
- 20) Dix, *op. cit.*, p.343.
- 21) Gibson, *op. cit.*, p.104.

- 22) Dix, *op. cit.*, p.345.; See also “Terutullian Quintus Septimius Florens”, *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, p.1352.
- 23) Dix, *op. cit.*, p.346.
- 24) *Ibid.*
- 25) *Ibid.*, p.347.
- 26) C.Baur, *John Chrysostom* (trans.byM.Gonzaga. Wesminster Md.:The Newman Press, 1958), pp.199–200.
- 27) *Apostolic Constitution*, V. i; *The Ante-Nicene Fathers*, VII, 437–442.
- 28) Davies, *Holy Week*, p.16.
- 29) *Ibid.*
- 30) *Ibid.*
- 31) 岸本羊一「受難週」『キリスト教礼拝辞典』, 177頁。
- 32) *Didache* (『十二使徒の教訓』) VIII,1; *Apostolic Fathers*, I, 321.
- 33) Maclean, *Recent Discoveries Illustrating Early Christian Life and Worship*, p.51.
- 34) *Apostolic Constitution*, V.iii; *The Ante-Nicene Fathers*, VII, 445–446.
- 35) Maclean, *op. cit.*, p.52.
- 36) *Ibid.*, pp.53–54.
- 37) *Ibid.*, pp.54–55.; See also “Lent”,*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, pp.810–811.
- 38) “Lent”, *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, p.811.
- 39) Maclean, *op. cit.*, p.59.